

里山頌歌

小林 まもる

萌黄色に里山が染まってくると

戦ぐ風が泡立ってくる

磯浜には白い波頭が近づき

海鳥の鳴き声はいくぶん

にぎやかに光り出した

もう演奏は始まったのだ

野ら猫の鳴き声が変わった

鉦を砥げ 鋏を取れ

舟を出せ 仕掛けはいいか

ペンを磨け 唄えるか

不器用な百姓の末裔たちよ

文明を塗しただけの狩人の倅よ

体が赴くところすべては始まる

決まりきったことように

・・怖くない 死んだらまた

かーちゃんが生んでやる・・

里山の母がいつもしてきた

いのちの洗濯

桜しだれる季節がやってくる

無為瞑想の時は

切り上げて離陸せよ

柔らかな水仙の二重喇叭が

樅の木の梵字菩薩が

いつもより寂れて見える

そうだ真言はその奥にある

スカートを全部捲りあげ

粘っこいお猪口を突き出した

シクラメンの花が

とても淫らに見えてしまったのは

生きものから人へのどこかで

言葉遣いの間違いがあつたからだ

赤白ピンク 絹の折り紙

ドクダミ状の葉の上に

群蝶のように取り付けられたのは

孫のような天真の姿

真言

太母からの贈り物だ